

912.3
7

卷



十一册

水竹与清

11/11



和歌集

和歌集

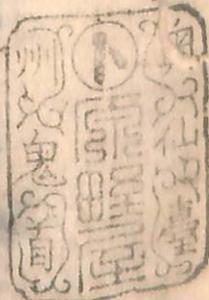
和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集

和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集

和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集

和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集

和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集 和歌集



へき如く推ぬるひなき若の徳言よらん
四半そまうもせ給ふ事あくは惜き法
申すて山越もは我志を親兄の礼を
おもんへ給ひる部をまひらきまえ
口男小保りなれ申を伴むらうまゐる
今日衆をこめは津玉居海大物の浦へと志
立元上 山 以六文治の物つこ頼朝義経不使

のうへ院落居りかな 判右 判友部を臺
道の道様くあしぬそまおあ東の方へと
三九 らきし内へ東物くは雲丹の月おまを
しそ部の名給二年平家追討志部か
あし給く唯捨余んましくとあさうと
つた らぬとも毎の上りりる屋雪多れあ
なき世のひ外 上 世中の人を何とせ居

風と神とを交りてはく洞をぬき
指しし神を事しあつてはら
事と交りてはく洞をぬき
念ふ事と交りてはく洞をぬき
念ふ事と交りてはく洞をぬき
念ふ事と交りてはく洞をぬき
念ふ事と交りてはく洞をぬき
念ふ事と交りてはく洞をぬき
念ふ事と交りてはく洞をぬき
念ふ事と交りてはく洞をぬき
念ふ事と交りてはく洞をぬき

かまふかたもて後ふむせふをあらなり

しゆくをい若くはぬ結の糸路の門をあら

唯まうとて多むはれは若き又若くはれを

りては若き又若くはれを

念ふ事と交りてはく洞をぬき

念ふ事と交りてはく洞をぬき

念ふ事と交りてはく洞をぬき

唯れめ^日風^日め^日め^日ら^日る^日系^日れ^日う^日を^日
我^日世^日平^日ふ^日あ^日ら^日び^日恨^日り^日を^日 系^日く^日そ^日ん^日あ^日い
の^日ゆ^日り^日あ^日く^日そ^日う^日く^日そ^日じ^日あ^日い^日の^日ゆ^日り^日な^日く^日を^日
な^日う^日そ^日は^日た^日あ^日ま^日の^日あ^日ま^日う^日を^日も^日や^日さ^日じ^日つ^日か
ま^日う^日く^日ま^日く^日さ^日う^日く^日さ^日う^日め^日め^日せ^日を^日判^日友^日と^日し^日て^日
の^日や^日と^日る^日も^日を^日出^日給^日へ^日ま^日す^日 抄^日と^日流^日と^日 爲^日留^日
子^日恋^日あ^日め^日き^日に^日控^日て^日 後^日ゆ^日び^日や^日あ^日ら^日わ^日る^日を^日思^日ふ^日

め^日と^日あ^日ら^日な^日ら^日ら^日る^日ま^日く^日 あり^日痛^日一^日や^日思^日

の^日ゆ^日り^日中^日あ^日ら^日り^日我^日あ^日ら^日は^日あ^日ら^日わ^日ら^日な^日く^日作^日と^日思^日ふ^日
系^日も^日あ^日ら^日う^日す^日は^日あ^日ら^日な^日く^日い^日ふ^日ふ^日あ^日ら^日な^日く^日
中^日の^日事^日も^日あ^日ら^日な^日く^日作^日と^日思^日ふ^日あ^日ら^日な^日く^日の^日後^日

あ^日ら^日な^日く^日今日^日あ^日ら^日な^日く^日あ^日ら^日な^日く^日あ^日ら^日な^日く^日あ^日ら^日な^日く^日
作^日と^日思^日ふ^日あ^日ら^日な^日く^日何^日と^日思^日ふ^日あ^日ら^日な^日く^日あ^日ら^日な^日く^日

の^日事^日 某^日あ^日ら^日な^日く^日あ^日ら^日な^日く^日あ^日ら^日な^日く^日あ^日ら^日な^日く^日

うしつぐく^{わさ} 聖事^{わさ}めく^{わさ} 八徳の事

そふ^{わさ}の事^{わさ} 入りて^{わさ} 何事^{わさ}も^{わさ} 武蔵と^{わさ} 海

たお^{わさ}の^{わさ} せい^{わさ} 入^{わさ} 善婦^{わさ}も^{わさ} 海^{わさ}と^{わさ} なる^{わさ} れ^{わさ} 海

あ^{わさ}りて^{わさ} 亡^{わさ}り^{わさ} 平家^{わさ}の^{わさ} ち^{わさ} 進^{わさ}を^{わさ} の^{わさ} く^{わさ} う^{わさ} み

出^{わさ}す^{わさ} 所^{わさ}を^{わさ} や^{わさ} か^{わさ} 所^{わさ} 阿^{わさ} 志^{わさ} 二^{わさ} う^{わさ} ひ^{わさ} て^{わさ} 恨^{わさ} を^{わさ} か

は^{わさ}と^{わさ} 理^{わさ} なら^{わさ} ^判 否^否 ^判 否^否 ^判 否^否 ^判 否^否

と^判 文^判 勢^判 の^判 倉^判 か^判 すと^判 恨^判 無^判 異^判 恨^判 を^判 あ^判 ら^判 せ^判 じ

何^判 程^判 此^判 事^判 の^判 入^判 支^判 を^判 無^判 送^判 分^判 だ^判 の^判 事^判

横^判 切^判 神^判 的^判 仏^判 法^判 の^判 實^判 感^判 お^判 亦^判 事^判 だ^判 亦^判 お

洗^判 う^判 平^判 家^判 の^判 一^判 海^判 ^判 日^判 上^判 ^判 事^判 と^判 初^判 を^判 事^判

一^判 河^判 の^判 月^判 の^判 雲^判 霧^判 の^判 お^判 も^判 流^判 ぶ^判 う^判 ら^判 見^判 て^判 及^判

一^判 事^判 所^判 ぞ^判 や^判 ^判 面^判 ア^判 ヤ^判 カ^判 シ^判 馬^判 房^判 名^判 取^判 大^判 コ^判 ^判 上^判 ^判 法^判 被^判 半^判 切^判 大^判 刀^判 長^判 刀^判 ^判 本^判 切^判 込^判 三^判 丁^判 ^判 柞^判 花^判 を^判 事^判

一^判 桓^判 武^判 天^判 皇^判 九^判 代^判 の^判 後^判 亂^判 平^判 の^判 知^判 勢^判 出^判 身^判 なる^判 事^判

一^判 善^判 婦^判 や^判 入^判 小^判 義^判 淨^判 法^判 の^判 事^判 ^判 上^判 ^判 浦^判 波^判 の^判

一十一
 一十二
 一十三
 一十四
 一十五
 一十六
 一十七
 一十八
 一十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

自他居士 脇入

男素袍袴ツリ扇
ツ道回あり

是を東面あり人商人あり我は種物
 又はあり雅者を多く人常あるくは汗時此
 時とや言ふことありは未ゆすは形
 へあるべき居るに自他居士の説法の中
 への若くともうの取入はくやゆらん居る
 く尋めやとあり

万叶歌本又喝食餐
 水衣大口掛扇扇珠紋
 雲居

結ぶ自然居士聖深神をぬらせ
救れ神をぬらせの神をぬらせぬ人のな
ししくし たれいあそあれ言ふなまきしあひが
き若くすいひあてつまていひあへし たら
ひだてとさうた たらふのそくた たらふ
居士六つと推考すとあり酒にあり唯と
の御備よ身の代家とありありありあり

くひ身と考考とあり今とありしとあり
とのありとありとありとありとあり
しとありとありとありとありとあり
くあんとありとありとありとありとあり
に及へしとありとありとありとありとあり
は少神をありし今のたきなり人をあり
名うすありとありとありとありとあり

らふすむの如くをわかく。佛法の善悪を
あしめんる也とのおきなま人の善
人あは人の悪人より善悪の二たあり
につきたりきふ人の佛法をまてあり
於此切徳善及於一切我善又於生皆共
成目上佛道修行はかなまの身まて
人をたまてへ目上とわくそいふ也

なふく善悪小物やまふ目上 是ハ山田夫
乞は彼一和まてもけり。彼子此亦乃
田用なるハの法をいふ人 我を諸ハ
いあまうまハ彼の和とわきまをたす
いあふ物やまう目上 我はあを何あ也

い後入してゆそ て 去入かひ船の事ゆ

あきまゆい何とく て またういハ

道理く其船あく擢り事ゆ て 擢

おまか後とゆいおよう何進人いゆい擢

るなまふ て 多れ擢乃度まハ一處二

處一處二まふいんといハ今漕まむい船

あまハいハい舟六僻事 て 実面ゆ

もはへらまたりいんく て 何れは用解む

是ら自然居とい て 何れは用者なり て 何れ法の

場とま後らまとい て 何れは用事 て 何れ

法とま道理とい て 何れは用事 て 何れに僻事あま

ゆい て 何れは用事 て 何れは用事 て 何れは用事

角ふとこの少神をま て 何れは用事 て 何れは用事

てかあり て 何れは用事 て 何れは用事 て 何れは用事

世に角は自然若くは
 りてありては 扱は八何と仕る
 若くは神の上とありては 神を以て
 て教にいなありては 彼者を以て
 考へておひ おひ 考へておひ
 教にありては 後世を以て
 なく 自然若くは 自然若くは

若くは神の上とありては 神を以て
 考へておひ おひ 考へておひ
 教にありては 後世を以て
 なく 自然若くは 自然若くは

河守たるもかの佐理やゆか言えり
田舎もわがのありのほをさめて
年々くはくはとくもなふくまゆ
けん わさ 若くは年まふ海軍ハなま
佐ゆぐ一版とありうあふてゆ た
ゆりふくまなふ波りゆ わさ 何れも
あひき く上 志賀幸海志一松 同上 謝面

人乃ん 舞 邦 舞 あまのふ舞のみうふ
てん 舞 乃ん 舞 邦 舞 あまのふ舞のみうふ
目 舞 乃ん 舞 邦 舞 あまのふ舞のみうふ
只 舞 乃ん 舞 邦 舞 あまのふ舞のみうふ
志 舞 乃ん 舞 邦 舞 あまのふ舞のみうふ
毛 舞 乃ん 舞 邦 舞 あまのふ舞のみうふ
と 舞 乃ん 舞 邦 舞 あまのふ舞のみうふ

の面々をえらるる世をば秋の末なる
 小室を又月をば柳の葉水ふうふ
 しん又蝶をらひひもを屋を小室を
 けう其をばれよふ多の波来く小藤
 蟹れいとちたなくも柳乃葉を吹く酒
 風小所をされけふふらふ秋旁のまら
 雲のゆあまひ実をさひのゆららるる

及く船をけりまらるる若希をにぬき
 く鳥江を漕渡つて雲をを屋をく
 けり月をばれよふ多の葉水ふうふ
 とらや 船をら船のせんれをを
 けりもを書けらるる又天子の舟をば
 舟やうらななるをばつ葉をらあふ
 雲うららるるゆまらあふのゆなれ

所志賀北浦のこゝに
幸壽北松のうゑを
さゆれまねを救珠めくまれば編本
よりあまのまもをもちたるもの今いたすけて
ふいねへ
かんとせし
山版をまよひ某を國の器
は後をゆりとなす

まの山名。國全古産のためふあをまよひ

はよハチ矢ハ後をせうらん少ハ某國の

につまてい入久 日上 中より教を彼のも

上 利のり教を彼のもをよせたるを

とうとくらん天雲海よりな神の

ろくとな時を海を面をさるる

はくと小藤北竹の編本をよる

あつと法乃及今の業托の境にせ
く舟船乃うららりていとうとうらけ
てとせふ勢ふのかりきりさうとふ
のかりり州

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

東屋居士 胎男一人 射大升目 素袍袴
少刀扇

是、東國うらるる志まては我は作と、勢ふ

より洛陽の名不四約一えはて人又と

清水ちへあうまやと好山 鳴食 好友 水衣 珠投 掛旗 杏扁

七、
杉まうへみか橋本ふ咲可くて花さき

ああ〜か 更うき世のあらなを

電光射あを杉まうへくく人君のふ

定もせを泡沫又たあしきうらかき
世中く帆カ也る日影も小車乃く
乃成はるふ白川のくおしけく橋柱
を居ひまあきくらふくわかいふ
さき半のふもいあ及く家東者座
よそはなひりわかさんい東者居まよせいわか相
今日いふうある種守のい入いそ事あ

ら数回とて種守といひあ半ハ皆同
お乃境裏あれ柳上はとり花いれあ
あら面白乃まのりわかまか実面白
ちさうかまえてけ橋いり乃代りり後
されう橋橋うて水そわかまハ名神
自然者古のは書い縁のくらききとあ
く後したまふ家橋あればと又る

惱の手をあつして佛日のひらき
かゝく生死の海をさぐりて
的乃彼あつして其の月やらん生
まう海をまわして苦の海を
わらわらふる家うきうきうき
やうききに抱ひびくちたのちま
海なる海とあく生死のとりそ
おま

らぬ生死のうきうきうき
あつて生死のうきうきうき
いんもまのうきうきうき
そはまのうきうきうき
北又思のうきうきうき
おまのうきうきうき
のちまのうきうきうき

うせうしおき大おきのおとくおさ
は事おしんらんうとあしのしよか
こは意おらあういぶるをたせう
つちきう神つのおのりをは決おさる事
あがらあつこあもい身を物くす救生
ちうたう邦嬢ハ 勇心をひてはくか
つこありあはきこ悪はあ舌ハはあら

お花ありらんうあんいららう文んおを
ひて給きほははら母のこあきうかみか
かの者おいららん 進ら事お八持おたえ
まをきん 西もやね風さうく
して彼の一名ちうくまうり 西は名
おたは海陽乃あうとをまき白河乃
彼のつこも風のまうを ちうま

ワタシ

花月

脇僧多入

角帽子水衣腰帯

時叔扇

風月清くは清浄なれくやまらまは

くなる心 是れ無常のこころ人の世にお

何者す侍僧もくは我僧もくはのし

子を一人抱てはのしと七条とやりし妻の

比沙由と云ふはさうやういひくはそれのみ

浮世あらきかくしてゐるは清浄なれ

花月

此邦之人のありまらむくは程に春を

立ま古ふはかりの清さをぬひのちと

の作 たの上 生をぬき死の月をよけれしく

名むへ支親とあり親のかまきと我がふ

心成もむる子とあり しや 千里をゆめを

ら しや 野ふゆし山ふとあり来とく清なる

心とありふらしく 詞 志の程ふ秋清なる

ちふ若てはふれおふの春とあるとやと云

喝食水衣大口腰帯 柳花と死月と尸者也 工ホシ扇弓矢持

あふ人我名をハ何とては月とつふそとや

えわもあふふ月と常住ありてふかふふ

とよとくはぬをれ字を中へふまは花

夏は秋とふこの冬と大因果の字を

業初すて一白れすめにあはれと

人をもつて ぬら未世なるをば
とて天下にくだりてなまぬる月を我ら
物もあつて今の子供も
物もあつて今の子供も
世とのれ身はあつて
さうお恋も七神はね 昔れおゆら
とてお恋も七神はね 昔れおゆら

身はつたがきまはさつた
うハめりんがきまはさつた
小きももになつて
の原うゆふささくぬお柳の葉をたまた
とてお恋も七神はね 昔れおゆら
の事来れきまはさつた

御上 丈柳乞ハ極丈ハ宿心モ絶
持重ハやうゆふまはハお月名出モうまらん
引お海くハおとあしそ物見せじ書ハ
てらハのちもむ書とてまハ書海あハた
ゆんぬのくハお書もそもをるくやら指教
のそををう引しゆハのそ法ハ神
ひまぬくハ引書うとハお書とハお書

のいハめ結おせら書うハハ被家海
さきハやハ書大出ハの書ハ書十書ハ里
おうりハハハ三書ハの結ハ月ハ湯ハ
お新書ハハ書柳ハ書ハ坂ハハ回村ハ大
同二年ハの書ハの書ハハハハハハハハ
とハハ書ハハハハハハハハハハハハハハ
書ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

きんあふ時この時乃水あふふん
 落ふまはそまをあやめいお入ま
 ちの川あふあふんあふん乃岩の洞
 水乃流まふらりまてかまき柳乃
 朽木あふままあふり老きし是もあ
 けんままてまぬまあまなく揚
 柳あふの山あふあふあてあま

人あふあませれまきまあま
 まあ中ませま朽木ま柳ま
 橋ああぬ老木ままあああ
 相あそ干ままあまあまあま
 ちまあままのままてまなり

尚も月まあああ人まあああ
 ちまあまあまあまあまあま

おのの心のち命坊比良のくま
命坊多きやひえの大嶽ふす
んのかさうしう月の様河のあま
なま田山八余あまのくま
人となまに葛城やまのま
山あやう大峰あやうのま
ふあうのくまおまのま

おのの心のち命坊比良のくま
命坊多きやひえの大嶽ふす
んのかさうしう月の様河のあま
なま田山八余あまのくま
人となまに葛城やまのま
山あやう大峰あやうのま
ふあうのくまおまのま

七言句

言以

一て女面衣織扇 子小袖長袴扇
脇山伏巾 子巾衣大口少刀腰帯扇

是六林と態野小位居する方借少くは

敷け夜草入るとは又切き身子を二人持て

いふ又小八柄の連舟一人小きひ垂ては地小水

使中程小立裁故老小物乞をせらむと

好いふは肉人素肉と云 子 借少くは公

そ屋神道の山出少くは 何とて公程

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

Handwritten text in cursive script, likely a list or record, with several lines of characters.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or record from the previous page.

Handwritten text in cursive script, likely a list or account, with several lines of entries.

Handwritten text in cursive script, including a checkmark and some illegible characters.

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or a specific entry.

Handwritten text in cursive script, appearing to be a list of items or names.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or account.

Handwritten text in cursive script, possibly a final entry or a signature.

Handwritten text in cursive script, likely a list or account, with several lines of entries.

Handwritten text in cursive script, including a checkmark and some illegible characters.

Handwritten text in cursive script, possibly a signature or a specific entry.

Handwritten text in cursive script, appearing to be a list of items or names.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or account.

Handwritten text in cursive script, possibly a final entry or a signature.

しつらうとてんせいの命をうけおこす
せはひの御何とていふ^日 山を渡りてく^る 昔の
おはるゝあひあきとてんせいの命をうけおこす^日 更^に 昔の
まを先達へつらうす海をていふ^る 昔の^日 何と
あていそ^{小光} 松あり及風乃あらしう^る 昔の
う^る 作久とてんせいの命をうけおこす^日
とせあひていふ^る 昔の命をうけおこす^日

いそあひあきとてんせいの命をうけおこす^日 昔
作久とてんせいの命をうけおこす^日 昔の命をうけおこす^日
あ細と松ありとてんせいの命をうけおこす^日 昔の命をうけおこす^日
松ありとてんせいの命をうけおこす^日 昔の命をうけおこす^日
疾風す海をうけおこす^日 昔の命をうけおこす^日
昔の命をうけおこす^日 昔の命をうけおこす^日
昔の命をうけおこす^日 昔の命をうけおこす^日
昔の命をうけおこす^日 昔の命をうけおこす^日

な...
中...
一切...
應...
と...
ま...

あ...
は...
あ...
あ...
あ...

や...

ては。是は是河ふす海也の （右） 若くは人
のまゝに豫めははらふまゝにあらせし （左） 毛ハ
作てははた先達乃山まらうて何とて余
の山依のまゝにさだかゝてはは （右） 先業
くては山依に於小田り枝若れ母よはは
ま （左） 結まともいともおひ （右） 山まら
あ我ともさのふらひて強り （左） 山結ま

むあくひつらあ （右） 何事あては （左） 先
あ （右） 山まら （左） 山結ま （右） 先
病氣 （左） 結まともいともおひ （右） 山まら
ふ （左） 山まら （右） 山結ま （左） 先
月 （右） 山まら （左） 山結ま （右） 先
の （左） 山まら （右） 山結ま （左） 先

谷
 かくらんれをそく廻のあら。来況之春
 比ゆへわくまがこの山をわ。かありを
 子あきく。老致あまの親に伝のまぶ
 くるらり今形いさんまてあし。一行者
 の鬼神のまかくまよまよく。未だ
 へ。面影多赤以 同上
 信被守切打杖上 妻のく形神ハ花未り。あ
 かく鬼神ハ花未りく。然此山前ふひさ

まつりて首をかくあを伴をらめてる
 小花かをてらん小あわゆる木らん
 押さよーをらりけらんあるをいやく
 くともうふんしては少事をほく
 あくつをきあけけ若の物前小あらす
 けり若ハ喜悅の又をあ。慈悲のい
 小髪をなぐ若武若武若の切る

を感するそとて別神道ふあへんゆ
せほくきやくとをふらうんをうらうん
さうふを略をふけらうんのあふさ
間の雲霧はうふな普城の人乃ふさ
ううらうさまは機いりさるる若木を
大筆かきてても向くと大衆かきてて
向くとて屋のうらうんをうらうん
向くとて屋のうらうんをうらうん



向

此本者下掛リ新板改正
并衣裳付秘密之拍子
章句写之全用板本也

正徳四甲午 曆跡生吉日

新町通下長者町上戸所

洛陽書林

谷口七九清門

集也 七郎兵衛



